

21世紀型スキル育成を目指した学習者体験型教師研修

—タイ人中等教育教師の気づきと学び—

中尾有岐

[キーワード] 21世紀型スキル、教師の役割、協働、考える力、プロジェクト型学習

[要 旨]

タイの中等教育では、これからのグローバル社会で必要とされる「21世紀型スキル」の育成が期待されている。それは現場でも認識されているものの、その必要性や日本語教育への取り入れ方については疑問を持ったままの教師も少なくない。そこで、タイ教育省と国際交流基金バンコク日本文化センター主催の「教師キャンプ」では、参加者である教師が、学習者としてプロジェクト型学習を体験した上で、教師の立場に戻って活動をふりかえり、21世紀型スキルの必要性と、それをどのように日本語教育へ取り入れるかについて考える機会を設けた。参加者のアンケート、レポート、インタビュー結果から、「21世紀型スキル」や「教師の役割」などの重要性に気づき、日本語の授業でもそれらの能力を育成すべきだと考えるようになったことがわかった。

1. はじめに

タイでは2015年末（予定）のアセアン経済共同体⁽¹⁾発足に向け、アセアン内での物品やサービス、投資分野の自由化が進んでおり、教育面においても外国語が重視されてきている。タイの中等教育では、2010年に教育水準向上を目指し、「World-Class Standard School (以下、WCSS)」という方針が導入され、日本語学習者数も88,325人と、2009年度に比べ3倍以上増加した⁽²⁾（国際交流基金2013）。科学、情報技術の進歩によって急速な変化を遂げる現代のグローバル社会で必要とされるのは、暗記した知識の量や公式を使って問題を解く力ではなく、あふれる情報の中から知を獲得する力、見極める力、それを自分の頭で考え、活かす力である。そして、他者と関わり合いながら問題解決を目指す協働力や創造力も求められる。こうした力は「21世紀型スキル⁽³⁾」と呼ばれる。タイ中等教育の2008年基礎教育コアカリキュラムには、「学習者が身につける必要がある重要な能力として、①コミュニケーション能力、②思考力、③問題解決能力、④生活スキル応用能力、⑤技術応用能力の5項目（国際交流基金日本語国際センター2015）」があげられている。これらは21世紀型スキルに通じるものである⁽⁴⁾。このように、タイ教育省は21世紀型スキルを育成する必要性を提唱しており、外国語科目の教師に対しては、それを目指したカリキュラムの目標と学習課程を深く理解し、学習に役立つ教材や技術を工夫して効果的に取り入れることを求めている。現場でも、こうした流れは把握されており、21世紀

型スキルも認識され始めているものの、日本語の授業への取り入れ方、その可能性、また、日本語学習と同時に育成可能なのかといった疑問は残っており、「教師主導」、「文型中心」の教え方を続ける教師も少なくない。21世紀型スキルは、会話や漢字の指導法のような教授テクニックではないため、講義を聞き、それがなぜ重要なのか、どのように授業に取り入れればよいのかということ、自身の現場と結びつけて理解するのは容易なことではない。しかし、学習者として体験すれば、その重要性に自ら気づき、行動へと繋がる可能性が高まるのではないだろうか。21世紀型スキルを教育現場へ取り入れる手法の一つとしては、プロジェクト型学習 (Project Based Learning ; 以下、PBL) が考えられる。PBLとは、学習者中心、内容重視の学習法で、社会活動を教室内外で行うものである。学習者は主体的に課題を発見し、深い思考、観察を行い、情報を収集し、わかりやすくまとめ、発表するという過程 (図1) を通して、仲間と問題を解決する力を育てていく。

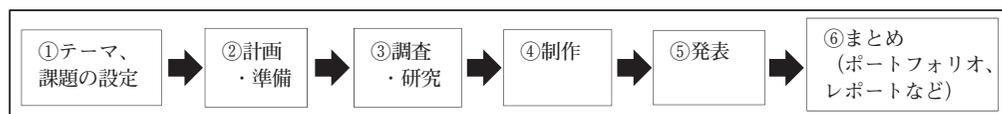


図1 プロジェクト型学習の進め方 (参考：當作・中野 (2013)、鈴木 (2012))

當作・中野 (2013) であげられている各活動を通し育まれる能力や資質の例を表1にまとめる。

表1 PBLの活動と育つ能力・資質

活動	能力、資質
学習者を実際に言語を使う環境に置き、コミュニケーションのための言語を使う	言語
準備のため、ペアやグループで作業する	協働力
計画を立てる、順序良く段取りを考える、意見交渉をする、自分の意見をはっきり述べる	高度の思考能力
グループ内で自分の仕事を責任をもって仕上げ、時間管理をして締め切りを守る	自律的な学習者
情報を収集、整理、それをどのように提示するかなどを考える	情報のリテラシー

こうした力を育むには教師の関わり方も大切な要素であるとし、教師は、「教える」という立場ではなく、「推進、助言、相談役」としてサポートする立場に立つことが重要とされている。

以上を踏まえ、国際交流基金バンコク日本文化センター (以下、JFBKK) では、タイ教育省との主催で、「日本語教育集中研修会2015「プロジェクト型学習」日本語教師キャンプ (以下、「教師キャンプ⁶⁾」)を実施した。タイ初の試みとなる「教師キャンプ」では、教師が学習者としてPBLでデザインされた活動を体験する場と、教師視点でふりかえり、考える場を設け、21世紀型スキルの重要性と共に、その取り入れ方や教師の役割に対する理解を深めることを目指した。本稿では、「教師キャンプ」の実施内容を報告し、参加者が提出したアンケートとレポート、インタビュー結果から彼らの気づきと学びを分析する。

2. 「教師キャンプ」実施に至る経緯

これまで、タイ中等教育では「教師対象」のキャンプは実施されていないが、図2のように「学習者対象」のキャンプは、「学校・地域」、「全国」、「国際」の各規模



図2 タイ中等教育における学習者対象のキャンプ

で実施されている。「学校・地域」では、2～3日間程度のキャンプが中等教育機関のタイ人教師によって、年に1回程度実施されている。内容は「浴衣の着付け」「盆踊り」「風呂敷」といった日本文化や日本語を使ったゲームやクイズを、ブースに分かれ、体験させるというものである。2013年にはタイ国外からも参加者を募った「第1回国際日本語キャンプ（4日間）」、2014年には全国規模の「第1回日本語インテンシブキャンプ（7日間）」が実施された。この2回は主に国際交流基金日本語専門家（以下、日本語専門家）が講師を務め、「社会・異文化体験」、「自発的な考え、行動を促進」、「学校で学んだ日本語学習の実践」、「自身の日本語能力への気づき、モチベーション向上」が目的とされた。前者は「おみやげ」、後者は「輝け！にほんごじん—多文化共生のために私たちができること—」というテーマで、目標達成に向けて、グループワーク、インタビュー、ポスター発表などが行われた。引率教師はファシリテーターとして生徒グループに入り、生徒のフォローや観察を通して、「学校・地域」規模で行っているものとは異なるキャンプの形式を知る機会を得た。2014年の「第1回日本語インテンシブキャンプ」では、コミュニケーション能力向上を主目的としたデザインをしており、活動後の教師ミーティングでは、翌日の活動内容確認に加え、教授法についての講義や、学校・地域キャンプや授業への取り入れ方を考えるグループワークなども実施された。

そして、2015年には「第2回国際日本語キャンプ（以下、国際キャンプ2015）（5日間）」の実施が決まり、生徒が21世紀型スキルを身に付けるだけでなく、タイ人教師が21世紀型スキルの重要性とその育成を目指す教師の役割を理解し、ファシリテーターを務めること、さらに授業への取り入れ方を理解し、自校での実践へ繋げることを目標とした。そのため、教師がより深く理解し、目標を達成できるよう、教師自身が学習者として体験をする「教師キャンプ」を、「国際キャンプ2015」の1か月前に実施することとなった。

3. 「教師キャンプ」実施内容

3.1 「教師キャンプ」概要

「教師キャンプ」実施概要は表2の通りである。講師は、JFBKKの日本語専門家、タイ人専任講師、中等教育機関タイ人教師2名の計4名が務めた。中等教育機関タイ人教師2名は、2012年～2014年の3回に渡り「にほんご人フォーラム（以下、JSフォーラム）^⑥」と呼ばれる

合宿研修に参加し、そこで21世紀型スキルの育成を目指した外国語教育について学び、自校での実施を想定した活動案も作成した。2014年度に活動案を作成する際、彼らはPBLによる授業案を取り入れることとした。同年、その活動案を含めJSフォーラムでの学びについて報告を受けたタイ教育省関係者から、この活動案をもとにしたキャンプ実施の要望があったことで、2015年度のキャンプのテーマ、内容が決定した。また、この2名を講師としたことは、中等教育機関の教師自身が企画・運営から実施まで関わるのが、今後の中等教育機関におけるリーダー育成に繋がるという期待もあった。彼らはJSフォーラムからの帰国後、教師キャンプを担当する他の2名の講師とともに、同活動案の学校での実施方法の検討、学校での実施、その後、生徒の成果物やフィードバック、教師自身のふりかえりを確認しあいながら、「教師キャンプ」で実施できるものへと内容を固めていった。

表2 「教師キャンプ」実際概要

日程	2015年4月2日～7日 (2日登録、3日キャンプ開始)
会場	タイ ナコンパトム県のホテル
参加者	中等教育機関の日本語教師98名(タイ中等教育公務員日本語教員養成研修 ^⑦ 1期生47名、日本語教育推進センター校 ^⑧ の代表者51名) [1グループ5-6人×18グループ]
参加条件	①タイの中等教育機関で日本語を教えている、②日本語の専攻科目のある学校のタイ人教員、③日本語能力試験N4相当以上の能力を有する
講師	4名：中等教育機関のタイ人教師2名、JFBKK タイ人専任講師1名、日本語専門家1名
サポート講師	6名：JFBKK 講師(地方派遣、タイ人講師、元専門家) [2人で6グループをサポート]
目的	a) 参加者がPBLを体験し、知識を得る b) 参加者が学校・地域での授業やキャンプ実施方法のヒントを得る c) 参加者が「国際キャンプ2015」でのファシリテーターの役割を理解する d) 講師のタイ人教師が、「JSフォーラム」で学んだPBLアプローチを他の教師に共有する e) 講師のタイ人教師がキャンプの企画、運営を体験する(今後のリーダー育成) f) 「JSフォーラム2015」(次年度)の参加教師を選抜する

活動案は「国際キャンプ2015」の生徒を対象に考えられており、「教師キャンプ」では参加教師が学習者としてPBLの活動を体験した。さらに、「教師キャンプ」から選抜した教師25名を、「国際キャンプ2015」に参加させ、同じ内容^⑨をファシリテーターとして再び体験できるようにした。異なる視点で二度体験することで理解が深まり、また生徒の様子を観察し、生徒の成長を見ることでさらに効果が実感できると考えた。講師も「教師キャンプ」と同じ講師が務め、同キャンプでの反省点を「国際キャンプ2015」に活かすなど、よりよいキャンプを提供できることも期待した。

3.2 実施内容

(1) テーマとその設定理由

キャンプのテーマは、講師のタイ人教師2名が考えた「Love Care Share：社会に目を向けよう！今、私たちがすべきことを考えよう！」とした。生徒に自分ばかりではなく、もっと社会に関心を持たせることを目標としており、原案は「障害者」について調べ、考えを深めるもの

であった。しかし、事前課題の調査やインタビュー、キャンプでの実施可能性を考慮し、調べる対象を「お年寄り」に変更した。参加者の周りに必ずいる人であるため想像しやすく、参加者自身の将来の姿でもあるため、自分に関わる問題として捉えやすいという利点もあった。

(2) 事前課題

参加者には「お年寄り」の意識づけと日本語の予習を目的に、事前課題を課した(表3)。記入しやすいようワークシートを作成し、事前に提出させた。キャンプ中、表3中のⅠ①～③は課題の目的を全体で確認し、Ⅱ①～③は活動に取り入れ、情報共有などを行った。

表3 事前課題の内容とその目的

	内容	育成される21世紀型スキル
Ⅰ. 社会に どんな人が いるか知る	①一日に出会った人の、自分との関係(または職業)を書く ②この1週間で、誰に何を助けてもらったか書く ③自分は誰のために何を助ける(手伝う)ことができるか書く	社会に関心を持つ、普段の生活を振り返る
Ⅱ. 高齢者 について調 べる	①お年寄りに便利なものやサービスの写真を撮って貼りつけ、それは何か、どうして便利かなどをワークシートに書く	お年寄りに便利なものを推測、写真を撮り情報を伝える
	②タイのお年寄りについて(人口、誰と住んでいるか、どこに多いか、働いているかなどと自分で考えた質問)インターネットなどで調べ、ワークシートに書く ⁽¹⁰⁾	必要な情報を探す
	③周りにいるお年寄りにタイ語でインタビューし(年齢、誰と住んでいるか、趣味、困っていることなど自分で考えた質問)、その結果を日本語でワークシートに書く	世代を超えた人とのコミュニケーション、情報収集

(3) 活動日程と目的

教師キャンプではPBL活動の学習者体験に加え、教師の立場からPBLや21世紀型スキルについて考える「教師ふりかえり」という時間を設けた。日程を表4、活動目的を表5に示す。

表4 「教師キャンプ」日程(■は「教師ふりかえり」)

日程	内容
1日目 4/3(金)	1. アイスブレイキング 2. お年寄りクイズ 3. 事前課題Ⅱ①の共有、発表(便利なものやサービスの写真と情報をシェア) 4. 事前課題Ⅱ③の共有、発表(問題のグルーピング)
2日目 4/4(土)	5. お年寄り体験(関節などに新聞紙やテープを巻き、動きを制限した上で、日常動作をする) 6. 「お年寄りが困ること」をグループで再考 7. 日本の高齢者向けのものについてのクイズ 8. 日本の高齢者向けサービスのビデオ鑑賞 9. グループで最終発表準備→途中で経過発表 課題「お年寄りに便利なものやサービスを考える」 10. 【教師ふりかえり】2日間体験して気づいたことの共有、21世紀型スキルとPBLとの関係
3日目 4/5(日)	11. グループで最終発表準備の続き
4日目 4/6(月)	12. グループ最終発表 13. グループで発表したものやサービスについてレポート作成 14. 懇親会
5日目 4/7(火)	15. 【教師ふりかえり】ふりかえりシート共有、21世紀型スキルとの関係、PBLへの日本語の取り入れ方、学校での取り入れ方など 16. 講師のタイ人教師2名より、各自の授業での実践報告 17. PBLの一部の授業への取り入れ方、国際キャンプ2015に向けての改善の話し合い JSフォーラム参加希望者への課題説明、アンケート、閉会式、参加証明書授与
毎日	活動後、「ふりかえりシート」記入

表5 活動の目的

活動	目的
2. お年寄りクイズ	①「事前課題Ⅱ②」で調べた自国のお年寄りについての情報共有、②世界のお年寄り事情の知識を得る、③お年寄りの問題を意識する
3. 事前課題Ⅱ① 共有、発表	①どのような「お年寄りに便利なもの」があるか知る、②発表のポイントを知る、③発表の日本語を言えるようにする、④自分の考えを伝える、⑤評価シートに慣れる
4. 事前課題Ⅱ③ 共有、発表	①お年寄りが困っていることを知る、②互いに質問しあい考えを深める、③発表に慣れる、④発表を聞き、考えを深める
5. お年寄り体験 6. グループで再考	①お年寄りにとって何が難しいのか、どのような気持ちになるのかに気づく、②グループで共有し、「お年寄りの問題」についての理解を深める
7. クイズ 8. ビデオ鑑賞	①日本の高齢者事情を知る、②オリジナルのものやサービスを考えるヒントを得る、③「お年寄りの問題」についての理解を深める
9.、11. 最終発表準備	①これまでの情報と考えを整理する、②オリジナルのものやサービスを創造する
12. 最終発表	①他者にわかりやすく伝える、②グループで協力して発表する、③他のグループの発表から、アイデアを得る、④日本語で発表する自信をつける、⑤日本語、発表方法の内省、今後の日本語学習の動機づけ
13. レポート作成	①情報・アイデアの整理、まとめ、②記録として残す、③達成感を得る

表5「3. 事前課題Ⅱ①共有、発表」では、講師が参加者に向け発表例を見せ、発表のポイント（態度、話し方など）と「発表の日本語」を全体で練習した後、まずグループ内で練習した表現を使って共有しあい、その後、グループメンバーの事前課題シートを模造紙に貼り付け、それを見せながら他グループに発表した。聞き手となったグループは評価シート（資料1）を使って評価し、そのシートを発表者に渡した。「4. 事前課題Ⅱ③の共有、発表」では、事前課題のインタビューからわかった「お年寄りが困っている」ことを付箋に書き出し、グループ内で共有し、グルーピングした。「発表の日本語」を練習した後、他グループに向け発表した。「9. 最終発表準備」では、考えがある程度まとまった時点で、A4用紙にアイデアを書き、それを机の上に並べ、他グループに見せながら発表した。グルーピングとアイデア共有の2回は、聞き手は評価シートを使わず、発表をよく聞き、新たに得たアイデアをメモさせた。発表者は質問されたことをメモしておき、その後、グループで改善案を考えさせた。「12. 最終発表」では、グループごとに発表し、聞き手は評価シート（資料2）を使って評価した。発表後、グループ内で他グループのよい点、改善点を話し合った後、発表者へ評価シートを渡した。次に、同じシートを使って自己評価した後、グループで話し合い、内省を深めた。

(4) 日本語

PBLの中に日本語学習を取り入れる際、日本語の目標 Can-do を設定し、その目的を明確にした。目標設定は「国際キャンプ2015」に参加する生徒を想定し、JF日本語教育スタンダードの活動 Can-do からキャンプの活動に合ったものを選び出し、作成した（表6）。1つの Can-do に対し、生徒向けに日本語で簡潔にまとめた「生徒用 Can-do」と、今後自分で活動をデザインする可能性のある教師向けにタイ語で具体的に記述した「教師用 Can-do」を作成し、「教師キャンプ」では両方を提示した。グループワーク（1日目、2日目、3日目「B」）、や発表（1日目、4日目「A」）のような類似した活動は、同じ Can-do で示した。

表6 日本語の目標 Can-do () は参照した JF Can-do のレベルとカテゴリー

	目標 Can-do	
	教師用 Can-do (参加者にはタイ語で提示)	生徒用 Can-do
1 目 目	A. ときどきメモを見れば、町でみつけたお年寄りに便利なものやサービスについて、短い簡単な発表をすることができる。また、事実確認などの簡単な質問に対応することができる。(A2 講演やプレゼンテーション)	Pre-task で、調べたことを発表しよう!
	B. 発表の準備をすすめるために、短い簡単な言葉で確認や指示をしたり、受けたりすることができる。(A2 共同作業)	グループワークのとき、日本語で話そう!
2 目 目	C. 異文化体験の出来事について、短い簡単な言葉で友人に話ることができる。(A2 経験や物語を語る)	お年寄り体験の感想を話そう!
	Bと同様	Bと同様
3 目 目	D. 発表の準備として、グループで考えた、お年寄りに便利なものやサービスについて、どんなものか、使い方や、コメントなどを短い簡単な文で書くことができる。(A2 作文を書く)	発表のスク립トやポスターを日本語で書こう!
	Bと同様	Bと同様
4 目 目	Aと同様	日本語で発表しよう!
	E. グループで考えたお年寄りの問題や、オリジナルのものやシステムについて写真で示しながら紹介する文を短い簡単な言葉で書くことができる。(A2 作文を書く)	日本語でレポートを書こう!

また、キャンプで使う日本語は全てを明示的に教えようとはせずに、「①明示的に示し練習(定着を目指す)、②文型例のみ示す、③使う機会を作る」の3段階に分けて取り入れた。①では「発表の日本語」に焦点をあて、発表のポイントを理解し、フレーズ(はじめの挨拶、内容、終わりの挨拶)を使って自信を持って発表することを目標とし、計4回の発表を行った(表7)。

表7 発表概要

	1回目	2回目	3回目	4回目
テーマ	「町にあったお年寄りに便利な物やサービス」	「お年寄りが困っていること」グループング	「お年寄りのための物やサービス」オリジナル案	「お年寄りのための便利な物やサービス」最終発表
内容	①どんなもの ②どこにある ③使い方 ④どうして便利	①カテゴリーの数 ②カテゴリー { どんな人 どんな気持ち どんな問題 }	①困っていること ②どんな人 ③どんな気持ち ④どんなもの ⑤使い方 ⑥どうして便利	①困っていること ②どんな人 ③どんな気持ち ④どんなもの ⑤使い方 ⑥どうして便利

発表で使う表現は重なりを多くし、表現の定着を狙った。3回目以降は、表現の提示はせず、それまでの発表を元に各自で考えさせた。「②文型例のみ示す」に関しては、活動中に使う語彙や簡単な表現の語彙リストを配付し、それを使ったり、辞書を引いたり、お互いに質問しあったりしながら話すことを期待した。また、「③使う機会を作る」は、できるだけグループメンバーと日本語で話し合う場を設けた。参加者はタイ人のみであるが、さまざまな国の生徒が集まる「国際キャンプ2015」における生徒の気持ちを理解するため、日本語を使うよう指示した。

(5) 21世紀型スキル

Partnership for 21century skills (Trilling and Fadel 2012) を参考に、各活動における21世紀型スキルの目標を Can-do で提示した(表8)。日本語の Can-do 目標同様、「国際キャンプ2015」の生徒向けに日本語で簡潔にまとめた「生徒用 Can-do」と、活動デザインをする可能性のあ

る教師向けに具体的な記述を示した「教師用 Can-do」の2種類を作成し、提示した。

表8 21世紀型スキルの目標 Can-do (() は参照した21世紀型スキルのカテゴリー)

	教師用 Can-do (参加者にはタイ語で提示)	生徒用 Can-do
1 日 目	A. 友達をつくらることができる (Communication)	はじめて会った人と話そう!
	B. グループに協力して、発表の準備をすることができる (Collaboration)	グループに協力しよう!
2 日 目	C. 体験を通してお年寄りの視点から考え、お年寄りの困っていることを再考する (Critical thinking)	お年寄りの困っていることをよく考えよう!
	Bと同様	Bと同様
3 日 目	D. オリジナルの「お年寄りに便利なものやサービス」を考える (Creative thinking)	オリジナルのものやサービスを考えよう!
	Bと同様	Bと同様
4 日 目	E. キャンプで体験したこと、学んだことを文章にまとめる作業を通してふりかえる (Creative thinking)	これまで学んだことを、ふりかえろう!
	Bと同様	Bと同様

教育心理学者ブルームの認知思考モデルを修正した六段階の分類「Remember→Understand→Apply→Analyze→Evaluate/Create」では、左から右に行くにつれて高度な思考活動となるとされている(近松2011)。キャンプでも段階を踏んで思考が深まるよう、「事実を調べ、理解→分析→創造」という流れを意識した。また、「協働」による気づきを促すため、グループでの話し合いや、協力して行う時間を多く取り入れるようにした。

(6) ポートフォリオ

ポートフォリオとして、活動で使うシートを綴じたリングファイルを配付した。また、シートの他に、「目標」と「ふりかえりシート(表:生徒用、裏:教師視点)」(図3)も挿入した⁽¹¹⁾。

The figure illustrates the layout of the target and reflection sheets. It is divided into three main columns: '目標' (Target), '生徒用ふりかえり(表)' (Student Reflection Sheet - Table), and '教師視点ふりかえり(裏)' (Teacher Perspective Reflection Sheet - Back).
 - The '目標' column includes '今日の目標' (Today's Target) and '21st Century Skill' objectives.
 - The '生徒用ふりかえり(表)' column features '今日の活動' (Today's Activity) and a '目標 Can-do' table with columns for '日本語' (Japanese) and '21st Century Skill'.
 - The '教師視点ふりかえり(裏)' column includes '今日の活動' (Today's Activity) and a '教師としての気づき' (Teacher's Insight) section.
 Arrows indicate the relationship between these components, showing how the target informs the student's reflection and how the teacher's perspective is derived from the student's activity.

図3 目標とふりかえりシート

「目標」と「生徒用ふりかえり」には、表6の「日本語の目標 Can-do」と表8の「21世紀型スキルの目標 Can-do」の生徒用 Can-do (①生徒用) が、「教師視点ふりかえり」には教師用 Can-do (②教師視点) が書かれている。「目標」には、目標 Can-do 以外に、自分が「今日一番がんばること (③一番)」をチェックする欄も設けた (図3の矢印は対応する Can-do を表す)。毎日、活動前に「目標」を見ながらその日の目標を確認し、活動終了後、「生徒用ふりかえり」で目標 Can-do と今日一番がんばることができたかどうかをチェックし、生徒の立場から体験した感想を記述する。その後、教師の立場に戻って、裏面「教師視点ふりかえり」の教師用 Can-do を確認し、自分の生徒ならどうか、自分が教えるならどうするかといった感想を記述させた。

(7) 教師ふりかえり

2日目の活動後と5日目には、PBLの学習デザインや21世紀型スキルの育成のしかた、そうした活動への日本語の取り入れ方を、教師の立場に戻って考える時間を設けた。2日目の「教師ふりかえり」では、それまでの活動と普段の授業の違いを考えさせた後、今回のキャンプの目的、PBLの流れ、21世紀型スキルとは何か、PBLの中でどういった力が伸ばせるかについて、概要を説明した。5日目には、4日間の生徒用・教師視点ふりかえりシートに書いたことを元に、「生徒としてどんな力 (日本語と日本語以外) が伸びたと思うか」「教師として、どんなことが勉強になったか」を各自内省後、グループで話し合わせた。その後、21世紀型スキルを復習し、キャンプの活動の中に21世紀型スキルや日本語がどう組み込まれていたかを考えさせた。また、日本語の目標や評価を考える際に参考にした JF 日本語教育スタンダードを紹介し、キャンプの活動はどの Can-do が当てはまるかを考えさせた。次にグループになり、地域のキャンプを PBL でデザインするとしたら、どんなテーマでできそうか、どんなところを取り入れたいかについて話し合わせた。話し合いは活発に行われ、「洪水」「1村1品運動」「時間を守る」「制服」など様々なアイデアが出てきた。その後、授業への取り入れ方を考えさせるため、講師のタイ人教師2名が、「教師キャンプ」前に実施した授業実践の報告をし、最後に、21世紀型スキルを育成するために、通常の授業でどのようなことができるかについて、例をあげた上で、考える時間を設けた⁽¹²⁾。

4. 参加教師の「気づき」と「学び」

キャンプ最終日のアンケートと、終了後に課したレポート、そしてキャンプ参加後に地域キャンプを実施した教師のインタビューから、参加教師の気づきと学びを分析する。

4.1 アンケート結果からみる「気づき」と「学び」

表9は、アンケート結果を、「とてもそう思う」4点、「まあそう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「全然そう思わない」1点とし、平均した結果である。全体の満足度は高

表9 アンケート結果

項目	平均値
1. 全体の満足度	3.84
2. キャンプの内容は自分の授業やキャンプに役立つか	3.91
3. 国際キャンプでのファシリテーターの役割がわかったか	3.61
4. いろいろな地域の先生とネットワークが広がったか	3.50

く、自分の授業やキャンプに役立つと感じた者が多いことがわかる。コメントには、「研修中は講義だけでなく、自分でやってみる活動もあり、よく理解できた」

「生徒の視点で見ることができ、キャンプの運営のし方も分かった」「ずっと前からこのような活動をしてみたかったが、活動のデザインや流れが考えられなかった。しかし、このキャンプに参加して、全体的なイメージが見られ、いいアイデアをもらった。現場に戻ったら、すぐ使おうと思う」のように、キャンプで一連の流れを学習者として体験してから「教師ふりかえり」をしたことで、理論だけではなく授業の流れ、運営の仕方が具体的にわかったという意見が多かった。さらに具体的な気づきと学びをレポートの分析から考察する。

4.2 レポートからみる「気づき」と「学び」

「教師キャンプ」では、最終日に「①気づいたこと②学んだこと③授業に取り入れたいことの3点をA4一枚程度にまとめる（自由形式、日本語またはタイ語）」というレポートを課した。キャンプ終了後、提出された56名のレポートの①②から参加者の気づきと学びを分析した。

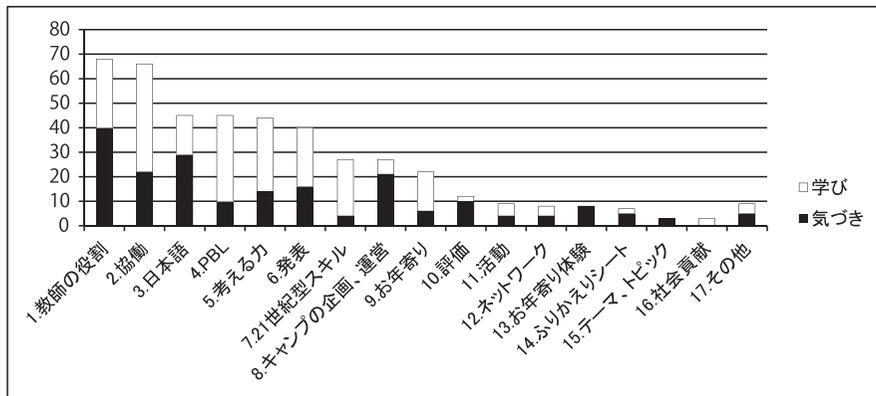


図4 レポート分析カテゴリーとその文の数

分析方法は、記述から①②③を3つに分け、①と②の各項目の中で、何について言及しているかという視点でカテゴリーに分けた(図4)。1文の中に複数の視点が混ざっているものは、複数のカテゴリーに入れ、カウントした。「①気づいたこと」は全196文、16カテゴリー、「②学んだこと」は全237文、15カテゴリーであった。図4の上位1～7の記述例を表10に示す。

最も記述数が多かったのは、「1. 教師の役割」「2. 協働」である。「1. 教師の役割」については、主に「教師は教えるのではなく、サポートする」「生徒に考えさせる質問をする」「学習者中心」という記述が多かった。参加者自身が創造力が豊かになったり (a)、分析的に考え

られたり (b)、学びたいという気持ちになったり (c)、心強く感じたり (d) したことによって、学習者の気持ちを理解している。それと同時に、質問のし方、動機づけ、励ましといった教師の発言、態度を観察していたことがわかる。こうした気づきや学びは、活動のデザイン、講師の全体への質問の出し方による部分もあると思われるが、担当のグループ（2人で6グループ）の活動を見回っていたサポート講師（JFBKK 講師6名）の支援による部分も大きく、「サポート講師が参加者の活動を助けてくれて、自由に考えたり、意見交換したりすることができた」といった気づきも見られた。今回のキャンプでは、参加者同士の協働による学びを重視しており、計画段階では、サポート講師には、進行の確認や日本語のサポートなどの質問があれば対応する役割を求めていた。しかし、実際には考えが滞っているグループに対し、考えさせるような質問をするなど、各サポート講師が考えながら実施しており、それが結果としてファシリテーターとは何か、教師の役割とは何かを考えるきっかけとなったようである。

表10 レポートによる「気づき」と「学び」の記述例

項目	記述例
1. 教師の役割	a. 教師は直接指導ではなく、 サポートする役割 だったので、生徒は 自由に考える ことができた。 b. 生徒に 分析的に考えさせる ための質問のし方を学んだ。 c. 質問をすることによって、学習者がそれに対する 好奇心 を持ち、 学ぶ動機 になる。 d. アイデアを出したとき、 教師に励ましてもらえたり、サポートしてもらえたりして心強かった 。
2. 協働	e. グループ内の コミュニケーションのし方とチームワーク を学んだ。 f. グループ活動では 生徒が自分で考え、お互いの意見を認め合ったり、協力したりするトレーニング になるので、 将来、生徒の生活の中でこのようなスキルが役に立つ と思う。 g. グループ内からグループ間までお互いに 知識を共有 することで、 自分の視野も広がった 。 h. メンバーの得意なことで 役割分担 をし、 トラブルが避けられ、短時間でタスクが達成 できた。 i. 自分の意見を述べながら 人の意見を聞く ことで、 一人でやるより新しい創造性が生まれる 。 j. 学習者が自分なりの作業のプロセスに気づき 、同時に 他の人の働き方も観察 できると思う。
3. 日本語	k. 日本語を使って、 自分の意見を言ったり、発表したり することができるようになった。 l. 日本語の 身技能「聞く・話す・書く・読む」 を使った。 m. プレーンストーミングは 日本語のコミュニケーション能力を向上 させる活動だと思う。 n. 教師はいつも日本語 で学生と接して、 学生が日本語を使う ようにする。
4. PBL	o. PBLの理論的なことを習ったことがあっても、 実際に行ったことがなかったから、PBLの進め方や必要性がわからなかった が、このキャンプを通し PBLという活動への理解が深まった 。 p. PBLの作業はもっと複雑で偉大なことだと思っていたが、 実は思っていたほど難しくなかった 。 q. 今回のキャンプで、 自分の授業のための知識や教えるテクニックをなくさん もらった。
5. 考える力	r. このような活動を通し、 将来何か問題があったとき、自分で解決する能力が身につく 。 s. 分析的・創造的な考え方のトレーニング になった。 t. 今回のキャンプで学んだことは、 生徒が自分で考えてやることが大切 ということ。
6. 発表	u. 発表の練習を繰り返す ことによって、 発表の力が上達し、自信も増す 。 v. 簡単な発表のプロセス について学べたので、 生徒が日本語を使って発表 できるようになる。
7. 21世紀型スキル	w. 21世紀型スキルの理論を学んだことがあったが、今回は 今までで最も理解が深まった 。 x. 今まで教師として21世紀型スキルを 重視していなかった が、このキャンプではPBL活動を活かして21世紀型スキルが取り入れられていたので、その意味が分かるようになった。 y. 21世紀型スキルの重要性 を学び、学習者に 21世紀型スキルを意識させる活動を考えるべき であり、現代社会を生きるためのスキルを 身に付けさせるべき だと思った。

21世紀型スキルの一つである「2. 協働」については、協働することで身につくスキルに関する記述 (e. f.) や、一人ではなく協働することによるメリットに関する記述 (g. h. i.) が多かった。さらには、協働が自分を見つめなおす機会にもなることを示唆するもの (j) もあっ

た。同じ21世紀型スキルの「5.考える力」では、身につくスキルへの言及 (r) の他に、今回の活動が思考力を鍛えるトレーニングになったという記述 (s) や、「生徒が自分で考える」ということの重要性に気づいたという記述 (t) も見られた。講師やグループメンバー同士の質問などから考えを深める経験を経て、「考える力」を育むことの大切さを認識するに至っている。

そして、「7.21世紀型スキル」全体に関する記述から、以前から21世紀型スキルを知っていたが、その必要性を認識していなかったことが改めてわかった。それが、このキャンプを体験したことによって、理解が深まり (w)、その重要性に気づき (x)、さらには、学習者に身に付けさせるべき (y) という認識にまで至っている。「4.PBL」でも、今回の活動を通して認識が変わったことが窺えた (o)。実践への可能性を見出している記述 (p) や、授業への取り入れ方がわかった (q) といった記述も多く見られた。

「3.日本語」については、「日本語を使う環境」を心掛けた結果が表れている。PBLの活動であっても、日本語能力の伸び (k) や、4技能全てが使えること (l)、グループでの話し合いが日本語のコミュニケーション力向上につながる (m) に気づいたという記述があった。さらに、教師の日本語使用が、「日本語を使う環境」を作る要因の一つであると気づいたことを示す記述もあった (n)。明示的に日本語を示した「6.発表」については、「発表スタイル」「発表の日本語」「いい発表とは」に関する記述が多く、繰り返すことで表現が定着し、自信がついたこと (u) や、簡単なパターンが示され、自分の生徒でもできる (v) と気づいたという記述が見られた。発表方法に関しては、授業に取り入れたいという記述が特に多かった。

それぞれの記述からも学習者として体験したからこそその気づきや学びが読み取れるが、「初めて生徒になったつもりで体験し、グループワークを行った生徒の気持ちや改善点が分かった」といった学習者として体験したことによる学びを具体的に示す記述も見られた。

今回は分析対象とはしなかったが、レポート「③授業に取り入れたいこと」には上述以外の気づきや学びも表れていた。「お年寄り体験など、自分で体験して学ぶ活動を取り入れる」といった、お年寄り体験による気づきや学びも大きかったようで、生徒にもさせたいという記述も多かった。このことから目的は異なるが体験の重要性が表れている。もう一つは「社会への関心」である。具体的な一連の活動案の中には、「社会の中で生活するためには、子供に一般のマナーを育成することが必要だ。早い段階でマナー教育すると、よりよい社会になる。」「ロールプレイや体験を通して、生徒に現在の社会問題を意識させることを取り入れようと思う」といった社会に関心を持つことを期待した案、その重要性を述べる記述が数多く見られた。

4.3 インタビューからみる「気づき」と「学び」

「教師キャンプ」と「国際キャンプ2015」の参加後、地域キャンプでPBLのデザインを取り入れて実践した教師もいる。その中から3名の教師に、JFBKKタイ人専任講師がタイ語で

インタビューを行った。項目とその回答を簡潔にまとめたものを、表11にまとめる。

表11 「教師キャンプ」参加者に対するインタビュー結果

	Q1	Q2	Q3
	キャンプ参加前は、これまでのキャンプの形式（ブースでの文化体験）に満足していたか。	キャンプに参加して、PBLを取り入れてみようと思ったのはなぜか。	これまでPBLについて聞いたことがあるか。ある場合、今回のキャンプと何が違ったか。
教師A	昔は、リラックスできるのに、ブースでもよほど思っていた。「この活動の目的は何か」と疑問に思ったことがあったが、 変えようとは思わなかった。	ただ、 日本語だけでなく、社会のことを考えるようになったから。 国際キャンプに出て、考え方や日本語が ずいぶん成長した生徒の様子を見て 、さらにやりたくなった。	修士コースであったが、 理論だけだったので、興味があるがやり方がわからなかった。 今回は、センター校や自分の学校のキャンプ、授業でもやってみようと思った。
教師B	ブースの形式に満足していた。 アンケートの生徒の満足度も高く、 変える必要はないと思っていた。 ただ、日本文化を教えるための道具（浴衣など）がない学校にとっては、日本文化に触れる機会となるため、こういった活動も引き続き取り入れたい。	生徒が自分で考えることができるので、生徒の将来に役立つ と思い、また、 自分の生徒でもできそう だと思ったから。（中略）センター校のキャンプに取り入れた理由は、1つ目は 参加していない先生にもシェア したい、2つ目は 難しくないので、生徒が楽しくでき、積極的に参加 できることである。	キャンプ前に、英語のセミナーで聞いたことがあったが、 やってみようとは思わなかった。 いいと思っただが、 理論ばかりでやり方がわからなかった。
教師C	前のキャンプのやり方に満足 していた。理由は知識がなかったから。キャンプの目的もわからなかったし、いいキャンプを作るためにどうすればいいのかという知識もなかった。	国際キャンプで、生徒が活動に参加しているのを見て、とてもいいと思ったから。生徒は、 積極的に活動に参加し、考えたりグループの友だちと協力したりして成長した。 それだけではなく、 日本語も上達した。	JFのセミナーでPBLについて聞いたが、 やり方がわからないから、やってみようとは思わなかった。 しかし、今回参加してやってみようと思った。 21世紀型スキルは必要だから。これまでのキャンプでは、21世紀型スキルを生徒に身に付けさせることができない。

Q1より、ブースでの文化体験形式のキャンプには、全員が満足しており変える必要はないと感じていたことが窺える。Q2からは、意識が変化した理由が見られる。「生徒が自分で考える」「友だちと協力」することで成長した、「社会のことを考えるようになった」という回答から、「教師キャンプ」で日本語だけではなく成長を感じ、さらに、「国際キャンプ2015」で生徒の成長を見たことが、必要性を感じる要因になったと言える。また、Q3より、3人ともキャンプ参加前にPBLについて聞いたことはあったが、やり方がわからず、やるうとは思わなかったことがわかった。今回、実際に体験したことで、実施への手がかかりと自信を得たと言える。

インタビューの中で、教師BとCは既に授業でも一部を取り入れていたことがわかった。教師Bは、「以前は、教科書の文型の練習部分を教えれば、最後のグループワーク、発表などの応用練習はいらなかった。キャンプに参加して、授業のやり方が変わった。」と述べており、「教師キャンプ」での体験が、「キャンプ」に限らず、授業での「教師の役割」、「活動のしかた」に対する意識にまで影響の及ぶものであったことがわかった。

5. まとめ

以上、「教師キャンプ」の実施概要、及び参加者が何に気づき、何を学んだと感じたかについての報告を行った。「教師キャンプ」で学習者として体験したことで、「PBLの活動デザ

イン]「授業への取り入れ方」といったことに加え、「教師の役割」や「21世紀型スキル」の必要性に対する理解も深まり、授業に取り入れたいという意識へと変わったことがわかった。インタビュー結果からは、「教師キャンプ」を経て、「やってみよう」という気持ちや自信が増したこと、キャンプだけではなく授業にも変化があったことがわかった。

地域キャンプを実施した関係者からは、実際にやってみると講師が何をするのかよくわからない、それぞれの活動の目的があいまいだったといった報告も受けた。反省や後悔も生じるとは思うが、まず「やってみたい」と思い、実際に実施したことが大きな一歩だと言える。今回のキャンプが21世紀型スキルの必要性を感じ、すぐに授業に取り入れるというすばやい行動に繋がるものであったことは大きな成果であると言えるだろう。一度経験すれば、次は一步進んだ視点で観察ができ、新たな気づきや学びが起これと思われる。今後はそうした教師のフォローや、まだ参加していない教師に対するフォローについても考えていきたい。

〔謝辞〕

共に講師を務め、「教師キャンプ」の企画、運営、実施にご尽力いただいた Duangchai Chongthanakorn 氏、Thirat Lomsri 氏、そして本稿の執筆にあたり、ご協力、ご助言もいただいた Prapa Sangthongsuk 氏に、この場を借りて、心より感謝を申し上げます。

〔注〕

- ^①ASEAN (東南アジア諸国連合) 加盟10か国 (タイ、マレーシア、シンガポール、ミャンマー、カンボジア、ベトナム、フィリピン、インドネシア、ブルネイ、ラオス) は、アセアン経済共同体 (Asean Economic Community) を創設し、地域的、国家的、物理的、制度的及び人的連携を強化することにより、経済成長、開発格差の縮小及び連結性の改善を目指している。
- ^②「WORLD-CLASS STANDARD SCHOOL」導入により、文科系だけではなく、理数系も含めた全クラスで英語以外の第二外国語の履修が可能となったことが、履修者拡大の要因と考えられている。
- ^③2002年にアメリカで設立された「21世紀型スキルのためのパートナーシップ (P21)」で提唱されている「21世紀型スキル」の知識、資質、スキルは次の4つである。(1) 主要教科の知識 (3RS: Rights, Responsibility, Respect) と21世紀を生きるために重要な話題分野の内容、(2) 学習スキルとイノベーションスキル (4Cs: Communication, Collaboration, Critical thinking, Creativity)、(3) 情報・メディア・テクノロジースキル、(4) 人生とキャリアスキル
- ^④タイ教育省は、『21世紀型スキル育成ガイドライン (<http://106.0.176.61/useb/Century21.pdf>)』において、21世紀型スキルの必要性、その育成を目指す授業設計ガイドライン、プロジェクト型学習、評価法について説明している。
- ^⑤本稿で用いる「キャンプ」とは、ホテルや学校に泊まりがけで行う合宿研修のことである。
- ^⑥「にほんご人フォーラム」は国際交流基金とかめのり財団主催の10年間にわたるプロジェクトで、ASEAN 各国と日本のつながりをより深め、21世紀型スキルを育成すること、さらに、外国語教育としての日本語教育モデルを創造して実施し、若い世代の相互理解の促進とグローバル人材を育成することが目指されている。タイ人教師2名は、日本で実施された2012年の準備事業、2013年、2014年の本事業に参加した。

21世紀型スキル育成を目指した学習者体験型教師研修

- ⁽⁷⁾ 「タイ中等教育公務員日本語教員養成研修」とは、中等教育機関の第二外国語教師の不足を補うために2013年から2018年までの6年間で600名（日本語は200名）の教師を養成するタイ教育省の研修である。日本語専門研修はJFBKKと国際交流基金日本語国際センターが担当している。
- ⁽⁸⁾ 「日本語教育推進センター校」とは、各地域の日本語の教授・学習の中心校である。各センターは地理的な位置に応じておよそ5～10以上のメンバー校に対応している。今回は、全28校あるセンター校に、メンバー校の教師を含めた中から、2名の参加者が選抜された。
- ⁽⁹⁾ 両キャンプは大きな流れや目的は同じであるが、一部各キャンプの特性に考慮した活動が含まれるため、順序や活動方法が異なる点もある。
- ⁽¹⁰⁾ 生徒対象の「国際キャンプ2015」の事前課題は、タイ以外の生徒は、自国のお年寄りについて調べさせ、キャンプ内で情報共有することで各国のお年寄り事情を知ることができるようにした。
- ⁽¹¹⁾ 目標と生徒用ふりかえりは、「国際キャンプ2015」での使用を想定し作成した。生徒へ提示するものと、教師が理解しておくべき内容の違いに気づくことも期待し、「教師キャンプ」では両方を提示した。
- ⁽¹²⁾ 講師を務めたタイ人教師2名は、通常の授業時間を利用してPBLを実践したが、PBLの一連の活動全てを通常の授業時間内に行うのはカリキュラムや時間を考えると難しい学校も多い。今回は、PBLの一連の活動全ての授業への取り入れ方ではなく、通常の授業内で21世紀型スキルを育成するためには、どのような工夫ができるか、教科書の学習目標に合わせてどのようなグループワークや発表ができるかなどを、体験した活動を参考にして考え、話し合わせた。

〔参考文献〕

- 国際交流基金（2013）『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版
- 国際交流基金日本語国際センター（2015）『21世紀の人材育成を目指す東南アジア5か国の中等教育における日本語教育—各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト—』国際交流基金日本語国際センター
- 鈴木敏恵（2012）『課題解決力と論理的思考力が身につくプロジェクト学習の基本と手法』教育出版
- 近松暢子（2011）「ツールを超えた思考プロセスとしての日本語へ：コンテンツベースにおける批判的・創造的思考活動の可能性」『Journal CAJLE』Vol. 12 カナダ日本語教育振興会
- 當作靖彦・中野佳代子（2013）『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』公益財団法人 国際文化フォーラム（TJF）
- Trilling, B. and Fadel, C.(2012) .*21st Century Skills : Learning for Life in Our Times*. Jossey-Bass

〔資料1〕発表1 (事前課題) 評価シート

発表1 (町にあるお年寄りに便利なもの) 4月3日 (金) (なまえ _____)

発表者: _____ (グループ: _____)

発表した人: _____

発表の内容 (/6)		1. もうすこしがんばって □説明がたりない  (2)	2. できました □便利な物やサービスについて、説明できた ・何か ・どこにあったか ・どうやって使うか ・どうして便利か (4)	3. よくできました □便利な物やサービスについて、 <u>くわしく</u> 説明できた (6)
話し方 (/6)	声の大きさ	1	2	3
	話すスピード	1	2	3
パフォーマンス (/6)	アイコンタクト	1	2	3
	じしんがある	1	2	3

〔資料2〕最終発表 評価シート

最終発表 (お年寄りに便利なものやサービス) 4月5日 (日) (なまえ _____)

発表者グループ: _____

発表の内容 (/3)	1. もうすこしがんばって □説明がたりない	2. できました □便利な物やサービスについて、説明できた ・お年寄りがこまっていること ・どんなものか ・使い方 ・どうして便利か	3. よくできました □便利な物やサービスについて、 <u>くわしく</u> 説明できた
話し方 (/3)	□どちらもよくない ・声の大きさ ・話すスピード	□どちらかがよくない ・声の大きさ ・話すスピード	□どちらもちょうどよい ・声の大きさ ・話すスピード
パフォーマンス (/3)	□パフォーマンスがあまりよくなかった ・アイコンタクトがなかった。 ・自信がなさそうだった。	□パフォーマンスがよかった ・アイコンタクトがあった。 ・自信のある様子だった。	□パフォーマンスがとてもよかった ・アイコンタクトがあった。 ・自信のあるようだった。 ・聞き手に語りかけるような態度だった。
チームワーク (/3)	□チームワークがあまりよくなかった ・発表しない人がいた。 ・自分が発表していないときは、何もしなかった。	□チームワークがよかった ・みんなが発表した ・自分が発表していないときも、チームのためにがんばった。	□チームワークがとてもよかった ・みんなが発表した。 ・自分が発表していないときも、チームのためにがんばった。 ・スムーズに発表できるようにみんなが協力した (collaborate)。

コメント (よかったところ、アドバイスなど)

